

保育者の思い違いにもとづく保育実践について ～絵本の読み聞かせを中心として～

目次

I 問題設定の理由	27
1. 絵本の読み聞かせが得意な保育者をめざして	
2. レッジョ・エミリアとの出会いと混乱	
3. 問題設定	
II 研究目標	28
III 研究方法	28
IV 研究仮説	28
V 研究方法の流れ	29
VI 研究内容	30
1. 思い違いにもとづく保育実践の実態を明らかにする	30
(1)これまでの私の読み聞かせの実践	
(2)実態を明らかにするための公開保育	
2. 思い違いにもとづく保育実践が幼児に対してどのような問題をもたらすのか	37
(1)保育実践	
(2)検証保育 事例 1	
(3)検証保育から	
3. 思い違いにもとづく保育実践を克服するためには	40
(1)保育から明らかになったこと	
(2)考 察	
VII 研究の成果と今後の課題	41
1. 研究の成果	
2. 今後の課題	
3. 終わりに	
(参考文献・資料)	

保育者の思い違いにもとづく保育実践について ～絵本の読み聞かせを中心として～

普天間幼稚園 宮城 隆子

I 問題設定の理由

(1)絵本の読み聞かせが得意な保育者をめざして

私は、保育者になって25～6年になる。当時の沖縄は本土復帰後であり、県全域で幼児教育に力が注がれ始め、公立幼稚園教諭の資質の向上をめざすための実技研修会や講演会が数多く開催されていた。そこでの私の関心は、絵本の読み聞かせを通して、幼児が共通語を話すことができるように促したり、語彙力を身につけさせたりすることであった。例えば、日本語特有の表現である「おおきなかぶ」の中の「とてつもなく」という言葉を幼児に知らせたいと考えていたし、あるいは障害のある子をテーマにした絵本を読み聞かせることで、幼児が障害のある子に対してやさしく接し、世話をするようになるだろう、心情に訴えるような絵本を読めば、心豊かな幼児に育つだろうなどと考えていた。こうして絵本の読み聞かせを得意とする保育者となることを心がけてきた私は、以下の注意事項を念頭において、その実践を行ってきたのである。①保育者が絵本を選定する、②静かに聞く、③読み終わるまで私語はいけない。①については、読み聞かせをする絵本は幼児を選定するものとは、考えていなかった。②や③については、躰に重点をおきそれは、他者に迷惑をかけることをねらいとしていた。静かに聞けない幼児には、態度や表情で示したり、保育者の意図や指示を察するように仕向けた。

(2)レッジョ・エミリアとの出会いと混乱

2002年11月、琉球大学教育学部の中坪史典先生の主催するレッジョ・エミリア・アプローチ（以下レッジョ実践とする）の学習会へ参加する機会に恵まれた。イタリアの幼児教育であるレッジョ実践は、幼児を主体とした、保育を

実践しているように思われる。これまで、読み聞かせの実践と幼児を主体とした保育活動を展開していると考えていた私は、このレッジョ実践のアプローチから、プロジェクト活動の技術的な指導方法や保育環境、それとともに具体的な子どもの見方や関わり方を学ぶことで、これからの私自身の幼児とのかかわり方を学ぶことで、幼児理解ができてくるのではと思い、この学習会に参加した。

しかし、レッジョ実践を学べば学ぶほど、私は混乱に陥ってしまった。と同時に自分自分の実践の問い直しをせまられたのであった。レッジョ実践において保育者は、幼児の探求心を促すような保育環境を提供したり、幼児の権利を保障したりしており、力強く、保育者と協同で探求や表現活動のできる存在として幼児を捉えている。また、保育環境は幼児の表現活動の学びの過程を知るための場として提供されていた。これに対して私は、以下のような思い違いにもとづく保育を実践していたのである。第一に、幼児は無限の可能性を有していると考えながらも、実際には、幼児を半人前の存在として捉え、常に手を差し伸べようとしていた。第二に、幼児とともに保育活動を築きあげなければならないと考えながらも、実際には、私自身が常に幼児の活動をリードしていた。第三に、幼児が主体的に自ら学び、模索することを願いながらも、実際には、私自身が幼児に答えを与えてしまっていた。第四に、保育環境の構成についても、保育者にとって絵本の読み聞かせがうまくいくように効率的に活動の場として設定することのみを考えており、幼児の表現活動を促進することを意図したレッジョ実践の環境構成とは大きく異なっていた。このことから、私の保育の中にレッジョ実践を用いることが安易に取り入れられないことは明らかである。さらにレッジョ

ョ実践は、ドキュメンテーションと呼ばれる保育実践の記録をもとに、幼児の活動について保育者間で最善の支援のありようが議論され、吟味されていることが日本の幼児教育と大きく異なっている。

(3) 問題設定

以上のことから、私がレッジョ実践から学ぶということは、私自身のこれまでの実践とレッジョ実践をつき合わせることで、これまで私が行なってきた思い込みにもとづく保育実践を明らかにし、私自身がその問題に気づくことであると考えた。そこで私は、早速、レッジョ実践におけるドキュメンテーションの手法を用いて、自らの保育実践をビデオで撮影するとともに、大学の研究者、大学院生、学部学生、小学校教諭、他の幼稚園教諭と連携しながら、私自身の保育を改めて振り返ってみることとした。するとそこには「なぜ、それが大事なのか、それにはどんな意味があるのか、それをすることによって幼児達にどんな関係が生じたのか」を深く考えることなく、保育者が幼児を操ることに終始した保育実践が浮かび上がってきたのである。

本研究の目的は、私自身の保育実践、とりわけ絵本の読み聞かせ場面を対象に、これまで私が陥っていた思い違いにもとづく保育実践の実態を明らかにするとともに、その原因を探ることである。

II 研究目標

本研究の目標は、以下の通りである。第一に、保育者がこれまで陥っていた思い違いにもとづく保育実践の実態を明らかにする。第二に、思い違いにもとづく保育実践が幼児に対してどのような問題をもたらすのか、その原因を検討する。第三に、こうした、思い違いにもとづく保育実践を克服するためには、どうすればよいのかを探る。

III 研究方法

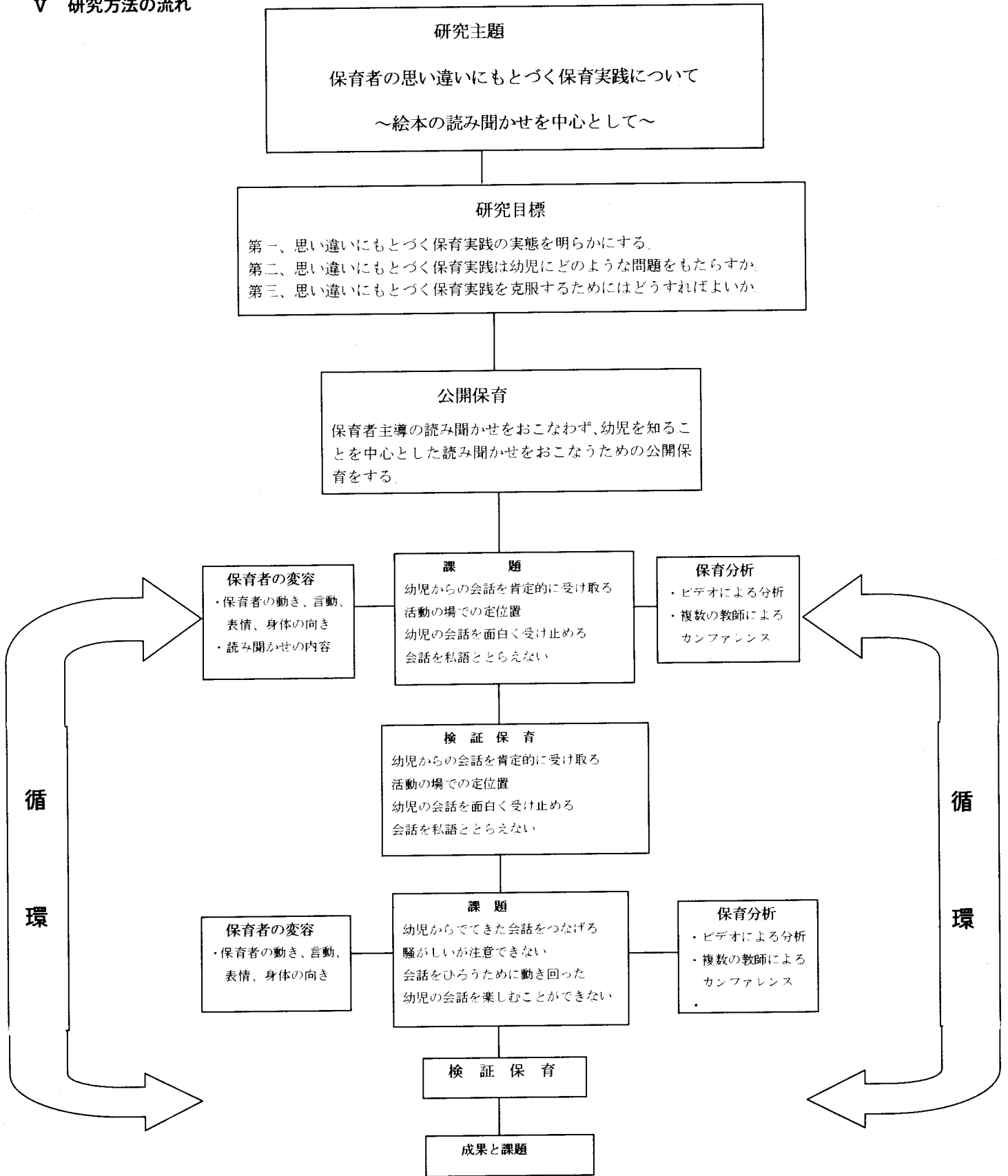
本研究を進めるにあたって、以下の三つを重

視した。第一に、私がこれまで陥っていた、思い違いにもとづく保育実践の実態を明らかにするために、同僚や幼稚園教諭によっては私の思い違いの実態を明らかにすることが難しいということから、外部の人と連携し、議論することで新しい発想が重要となると考えた。そのために琉球大学大学院生の當山しのぶさん（城西小学校教諭）と連携し保育を観察してもらうことにした。観察にあたっては、保育における私の言動、身体の向き、表情、幼児への対応などを中心に観察記録をしてもらい、保育内容と私の行動の意味や考えをつきあわせて吟味した。そこで、幼児に何が起こっているかに気づかないところを指摘してもらうというように當山さんに自覚化をうながす役目をしてもらった。第二に、琉球大学教育学部の中坪史典先生の主催するレッジョ実践の学習会への参加を通して、『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育—』の文献をもとに、レッジョ実践について学んだ。レッジョ実践における教師の役割と幼児観、これまでの私自身の保育観と保育実践を照らし合わせながら、保育の思い違いにもとづく保育実践によって、それが幼児にどのような問題をもたらすのかを究明するために学習会に参加した。第三に、読み聞かせの実践を大学の研究者、大学院生、学部学生(3名)、小学校教諭、他の幼稚園教諭計7名でビデオを通して保育を撮影したビデオ記録をもとに、思い違いにもとづく保育の実態の分析と省察を行った。

IV 研究仮説

保育者の実践活動をビデオで撮影し、カンファレンスを通して分析することにより、どのような思い違いがそこにうまれているかを明らかにすることができるであろう。

V 研究方法の流れ



V 研究内容

1. 思い違いにもとづく保育実践の実態を明らかにする。

(1) これまでの私の読み聞かせの実践

私は、幼児に豊かな心が育つためには、保育の中に絵本の読み聞かせを位置づけることによってできると考え、実践してきた。そこで沖縄県子ども本研究会に入会し、読み聞かせの技術を高めたり、絵本の中の主人公などを人形で作ったりするような絵本の読み聞かせをすることを得意としていた。絵本の読み聞かせをすると、幼児は絵本に集中し、真剣な表情で絵本に見入ってくれた。

研修会や講演会などでは、幼い頃から絵本や物語を読み聞かせると、感性が育ち、豊かな心が育まれ、思いやりの心、想像力が育まれるといわれ、また絵本の中のリズムカルな言葉は、語彙力を豊富にするといわれてきた。また、家庭ではなかなか、両親が忙しく、絵本に親しむ時間が取りにくいだろうと考え、幼稚園においてならゆったりと時間をとって幼児に絵本の読み聞かせができるだろうと考え実践した。

しかし、私は絵本の読み聞かせをする時、話を聞く態度や静かに聞く態度に捉われ、幼児が保育者に集中するように仕向け、さらに、その中で私語をしたりする幼児には、保育者が表情や態度で私語はいけないと知らせていた。保育者が読み聞かせの絵本を持って、幼児の前に立つとかれらにとって静かに座って待つということが当たり前のように教えてきた。それらは、話をする人に対して失礼にならないようにというようなマナーのひとつとして考えていた。

(2) 実態を明らかにするための公開保育

保育者主導の読み聞かせは、どのようにしておこなわれているのか、なぜ保育者主導の思い違いをしてしまうのかその原因をあきらかにするため検証し、思い違いをおこしてしまっているだろうと思われる仮説を探ることにした。そのために、

保育を公開し、保育者と幼児のやりとりを中心にビデオ撮影し記録することにした。まず、ビデオカメラを幼児用、保育者用の2台設置し、撮影し記録した。以下に、仮説を作り出すために公開保育を行った指導案を紹介する。

①公開保育

指導案 平成15年1月23日(木)

普天間幼稚園1組保育者 宮城隆子

男18名 女14名 32名

(ア) 主題名

園生活を通して人とのかかわりを育てるための教師の支援

教材：絵本「だるまちゃんとうさぎちゃん」

作：絵 かこ さとし (福音館)

(イ) ねらい

- ・一人一人の子ども顔や表情を意識して読み聞かせをする。
- ・『だるまちゃんとうさぎちゃん』の絵本の中でてくる軍手人形や帽子などで遊ぶ。

(ウ) クラスの実態

- ・素直で明るい子が多いがまだ、自分を出せない子がいる。
- ・私語が多く落ち着きがなかったが、朝の会や集会を重ねることで、聞く態度が少しずつ育ってきている。
- ・好きな友だち同士の関係ができ、物の取り合いやトラブルもあるが自分達で解決している。
- ・友だち同士ぶつかり合ったりすると、仲裁に入る子が増えてきた。

(エ) これまでの経過

これまで私は、絵本の読み聞かせを通して、幼児に思いやりの心が育ち、豊かな感性や想像力が育まれ、幼児の語彙力も豊富になるのではないだろうかと考えて、それを研究テーマとして掲げていた。読み聞かせを通してどのような力を育てていくのか、また、その読み聞かせを他の保育活動

や遊びと、どのようにつなげていくのか、読み聞かせの環境設定などについてどのようにしていくのか、などについてはまったく気づかずに読掲げてきた。なぜ、読み聞かせを通してこのような力を育てていくのか、また、その読み聞かせを他の保育活動や遊びと、どのようにしてつなげていくのか、読み聞かせの環境設定はなんのために、なぜ必要なのか、などについてはまったく気づかずに読み聞かせを行っていた。琉球大学で、イタリア北部の小都市レッジョ・エミリアの幼児教育について学ぶ機会があり、保育者と幼児が学びの協同的構成者として、相互に成長することやそこで保育者の役割、学びあう関係などを知ることができた。レッジョ・エミリアの幼児教育とわたし自身の保育を照らし合わせてみたときに、今まで、私が実践してきた絵本の読み聞かせは「本をうまく読む」ことや「表情豊かに読む」ことにとらわれ、単なる技術だけであり、実際に、目の前にいる一人一人の子どもに向き合っていないということや子どもの様子を思い浮かべながら、読み聞かせを行っていないことに気づいた。また、読み聞かせの絵本を選ぶときにも、幼児とともに話し合っ「どんな本がいい?」「次は、どんなお話が聞きたい?」などと聞くことはなく、保育者主導で絵本を選んでいる自分がある。そこで、今回、子どもを知ることを中心にして読み聞かせをしたいと考え公開保育を実施した。

②公開保育を終えて

公開保育を終えた直後、本日の公開保育はうまくいったと思った。なぜなら、幼児の声に耳をかたむけるように心がけていたし、幼児の声をだいぶ拾うことができたと思ったからである。しかし、ビデオの撮影記録を見ると、それはまさしく、これまでと変わらない私自身が存在していた。レッジョ実践の勉強会で時間をかけて保育者の役割や幼児のとらえを話し合い、討議してきたのになぜ?ということが自分自身の中に生まれた。そしてその後、レッジョ実践のメンバーである琉球大

学の研究者(中坪文典先生)、大学院生(當山しのぶ先生)、学部学生(3名)、小学校教諭、他の幼稚園教諭計7名でビデオを通して保育を撮影したビデオ記録をもとに、思い違いにもとづく保育の実態の分析と省察をおこなった。すると以下の四つが明らかになった。まず幼児からの会話に対しては「そうそう」と相槌を打っているが、幼児の思いを注意深く聞き取ろうとせず、会話が続かないで終わっている。第二に、保育者は幼児の会話の中から、保育者の期待した会話を拾いあげようとしているが、幼児は保育者の期待する答えをさがすことができず、答えられない。第三に、保育者は常に定位置に立ち、移動することもなく、立つ位置が決まり、後ろに座っている幼児の配慮に欠けている。第四に、絵本に関する幼児のつぶやきをすべて私語と捉えていた。

公開保育をしたことで、以上のことが明らかになった。次回は、公開保育で明らかになった4つの課題をもとにそれが、なぜ起きたのか次回の検証保育で検証した。

③考察

以上から、私は幼児に寄り添う保育を心がけていると思いながら、実は幼児の思いや考えを尊重していないということが考えられた。それは、保育者が、幼児を半人前と捉え、だから、幼児を支援し、見守らなくてははいけないと思い違いをして、幼児と関わってきたのではないか。そして、幼児一人一人を大事にするということは、幼児の人権などとかかわってくる。しかし、改めて幼児の人権については、考えが行き届かず、日々の保育を過ごしてきたのではないかということがわかった。『だるまちゃんとうさぎちゃん』の保育を撮影したビデオを視聴後、保育者の思いちがいによる実践がどのようにおこっていくのかを保育者の発話を図式化してどのような思い違いがそこに生まれているのかをみることができる。

④ビデオ撮影した保育記録の中から

教材：絵本『だるまちゃんとうさぎちゃん』

作：絵 かこ さとし (福音館)

～絵本の中から～

でも、どうしてりんごがなくなって、ざとういちのゆきだるまになっちゃったの。

うん、それはねまた、こんど きたときに おしえてあげようね。うん じゃあ だるまちゃんに だるまこちゃんに ざとういちのだるまちゃん さようなら さよなら うさぎちゃんも うさぎこちゃんも ひよんひよん ゆきのなかをかえって きました。ところで、どこへりんごがいったのか どうしてざとういちのゆきだるまになっちゃったか わかったら うさぎちゃんにそーっとおしえてあげてくださいね。おっしまい

T1：わかる

C1：わかるよ

T2：わかるの？

C2：わかるけど今おしえない

T3：おしえないんだ

C3：先生、先生あのさあ、うさぎの形のりんご 僕のお母さん作れるよ。

C4：ぼくのお母さんもつくれるよ (みんなに見えるようにそのページを開いてみせている)

C5：もしかして、あれで、あれで、やったから じゃない

T4：どれで

C6：あのさあ、だるまどんがうさぎつくったから

C7：そうだよ

T5：どうしてわかったの

けんた：だってさあ目がなかったから

T6：ああ、そうかなーどうしてわかったの

C8：そうだよ、外にいるっていったから、外でさーりんごを取ってからその穴をうめた

T7：じゃあ なんで、りんごが4つあるの

C9：それは、切ったから

T8：ああそうなんだ

C10：切ると4つになるでしょう

T9：切ると4つになるの？

C11：切ると4つになるよ

T10：ああそうなんだ

C12：切るといくつにもなるよ

T11：切るといくつにもなるよね。葵ちゃんたち いくつにきるの？

C13：半分に切る、半分に (そのページを開き、りんごを切るまねをしている)

T12：でもさあ、お母さんは、半分に切って、それを3つに切ってうさぎちゃんを作ったみたい

T13：今日の弁当に入っていないかな

C14：はいってない、はいってない

C15：いちごがはいっている

T14：お母さん、これ作るの得意なおかあさんいるよね

C16：だるまちゃんがいい

T15：だるまちゃんつくってもらったら、しょうた今度だるまちゃんとか作ってもらったら (♪だるまさんがころんだと歌いだす子がいる♪)

C17：ああ、この本買いたくなった

T16：でも、この本図書館の本だよ。借りられるんだよ。幼稚園のだから

C18：やったあー 借りよー (絵本の裏表紙をみせて貸し出しできることを説明している)

C19：先生、先生、この本幼稚園でないところで 借りたことある

T17：公立図書館だね

C20：先生、次、なにやるの？

T18：さあ次はね、だるまちゃんのシリーズにだるまちゃんにとらねこちゃんっていうがあるよ

C21：とらねこ とらねこちゃん？

T19：最初は、だるまちゃんとは何だった？

C22：てんぐちゃん

T20: だるまちゃんとかんぐちゃんだったね。これは、だるまちゃんとうさぎこちゃんでもおもしろかった(何度も、何度も絵本をみせている)

C23: おもしろかった

T21: どこがおもしろかった。(絵本を広げてどこの場面か問いかけている)

C: これ、この人がおもしろかった

T22: どの人?

C24: こっちじゃない(竜太が前にでてきて、絵本をめくって教える)

C25: このひと

T23: ああ、座頭市のだるまちゃんね

C26: 小指の、小指の、小指の

T24: ああ、座頭市のだるまちゃん?と丹下佐善の目がないところ?

C27: これ、(ページをめくりながらどこの場か言わせるようにしている)

T25: ああ、小指こっち

C28: こっちもたのしかった

C29: ちょっとやてみたい

C30: やったことある

T26: 最初どこの指いれたんだっけ

C31: 親指と中指

T27: こう入れて(5本の指を広げて、親指と中指、人差し指を見せる)

C32: くすりゆび

T28: こうやって、ここに入れて、やってみる? こっちにあるんだけどさー かけてかけてって遊びたい人いる?

C33: いるー やりたい。 つくりたい。

C34: ちょっとやてみたい

T29: ちょっとやてみたい?ふーん だれが作りたいといったー。

T30: みんなさあ、先生ね、この絵本がこんなに面白いのがいっぱいあるんだとは、思わなかったんだ。今まで読んでいたけど、これなんかもほらね。いろいろ面白いのがあるんじゃない。

C35: あるー。だからいっぱいある。

T31: 作りたいと思ったの

C36: うん だから作りたい。いっぱい作りたい。

T32: こっちにさあ 手袋があるんだ作りたい人どうぞ。

C37: えっ

らんな: ああ、やばり

T33: はい!手袋あるんだ。くろがいの

C38: ピンクがいい

C39: せんせいピンクかして

C40: あー うきょうにでかすぎる。

T34: けっこうおおきい?

C41: ちょっと大きいよう

T35: ごめーん、これ、子どものことまで考えなかった。ここまで。

(みんな声を出して笑う)

T36: そうだね。先生の手にいいぐらいだ。

C42: 黒のがよかったよ。

T37: ああそう、くろのがいいの?どうしたの爽世、

C43: どこにいれるの?どんなやってどこにいれるの?

T38: あー まってよー。本どこだった。見てみて!はい!

C44: ええーみてってー

C45: 爽世、手袋、ないみたいよう。

T39: 手袋あるはずよう。ないの?爽世自分で言

って。

C46: 先生こうやってはめるの?

T40: そうそうそう!こっちにあるんだよ手袋。

C47: 先生ちょっと 絵本かして

T41: 最初ね、最初なんか、親指だった、親指なんか中に入れてから、昌志やらない代わりに先生しておしえてね。お兄さん指だった?

C48: ねえねえ いっしょにやろう。

C49: わからん人

T42: 中指、中に入れるって引っ込めることみたい

C50: わからない人、手あげてー
 T43: ほら! わからない人、手あげてて。
 C51: わからない人
 C52: 先生こんな。
 T44: そうそうもうちょっと引っ込めてごらん。
 C53: もうちょっと このくらい?
 C54: 先生このくらい?
 T45: そうそう
 C55: 先生これ、手にいれるの。
 T46: そうそうそう
 C56: 中指ってどれ
 T47: お兄さん指にこと
 C57: できたー
 T48: まさしおしえてあげて、まさしどこ?
 T49: まさし、いれてあげて。
 C58: あーもう、わからん、いみわからん
 T50: いみがわからん?
 C59: あっ、わかった
 T51: 子どもの手には、あわなかったね。
 C60: わあー、でかすぎー
 T52: そう、子どもの手には、・・・
 C61: はあ、あたたかい (人形はやめて、両手に手袋をはめて両頬にあてている) こんなやっつれば、安心だ、あんしん
 C62: ゆきみたい。
 T53: そう、安心。ここ引っ込めて、親指いれてから、こうして (わからない子たちにおしえる)
 C63: できたー (何名かの子が人形をみせる)
 C64: できたー
 T54: あー、すごーい
 T55: こんにちは! (人形に向かって挨拶する)
 保育者の見てないところで、軍手人形ああでもない、こうでもない軍手を自分で工夫しながら、人形を作っている。
 C65: できたー!



わからない人 てあげてー



真剣な表情で聞いている



ほらできたよー みせてー

その後、それぞれ手袋人形が出来上がり、友だち同士見せあいながら遊びに発展していった。

まさしく保育者が保育者主導で幼児達を誘導したので、ほとんど全員が手袋人形をつくった。新聞紙で帽子作りに発展する幼児も何名かいるのではないかと考えて、新聞紙も幼児の中から要求があれば、すぐ対応できるように準備していたが、要求した子は一人だった。保育者は幼児が自ら進んで作りたいと手袋人形を作ったと思っていたが、それは私の思い違いであることが、ビデオ記録中にはっきり証明されていた。保育者主導の保育が確認でき、認めざるを得なかった。

良太&蘭奈のかかわりから

良太が軍手人形で遊んだ後、「うさぎがかぶっている帽子を作りたい」と言ったので、新聞紙を渡した。一人で作っていたが、蘭奈が側にきた。一生懸命帽子を折っている良太に向かって蘭奈が「良太まちがっているよ。かぶとの折り方だよ。かぶとと同じだよ。」と横から何度も口を挟む。肝心の良太は自分で何度も折りながら、蘭奈の言っていることはおかしいと気づきながら、何度も絵本と照らし合わせたりして、折っているがなかなか思うようにいかない。蘭奈が貸してと言って、いつの間にか帽子を折っている。その後、良太は蘭奈に負けてしまったのか。

⑤保育者の思い違い



2. 思い違いにもとづく保育実践が幼児に対して どのような問題をもたらすのか

(1) 検証保育をするにあたって

1月23日(木)に私の保育の実態を知るため公開保育を実施したが、これまでの保育者主導の保育から幼児を主体とした保育を目指したが、保育者が思い違いにもとづく保育実践であることに気づき、そこから、検証保育に望んだ。公開保育での問題点から仮説を立て、前回の反省を踏まえ、検証保育を実施する。しかし、前回、保育者が保育者主導と考えたことは、保育者が思い違いをしていることから起きるのではないかと考え、なぜ保育者は思い違いにもとづく保育実践をしてしまうのか、公開保育から明らかになった以下の4つを検証した。

- ・ 幼児の発言に保育者が一問一答の形式で答えているのは、保育者が答えてほしいと思っている答えか、或いは、わからないと察知したとき、もっている答えを教えている。このことから、保育者は答えを持ち、その答えを幼児に教えたがっているのではないか。
 - ・ ねらいからずれていると思われる幼児の意見に対して「そうそう」「そうだね」だけの相槌で会話をし、積極的にかかわらない。このことから、ねらいにそった一本のレールを保育者は持って保育に望んでいるのではないか。
 - ・ 幼児が騒がしいのは実は私語ではなく、絵本の面白い場面について話し合っている。しかし、保育者は幼児の会話に耳を意識して傾けることがないため、気づくことができないのではないか。
 - ・ 保育者は子ども達の様子を観察するつもりでいたが定位置で動かない。このことから、幼児の声や様子をどのように見ていけばよいかを意識しながら保育をしていないのではないか。
- という以上4つの課題が明らかになった。

(2) 検証保育 事例1

指導案 平成15年2月27日(木)

普天間幼稚園1組 保育者 宮城 隆子

男18名 女14名 計32名

① 主題名

絵本『からすのパンやさん』の読み聞かせをもとに、幼児と楽しく遊ぶ。

教材：絵本『からすのパンやさん』

作：絵 かこ さとし 偕成社

② ねらい

・ 絵本を楽しんで、絵本の中からでてくる会話を取り上げて、楽しく遊ぶ。

③ 留意点

- ・ 幼児の思いや願いは何か、活動の場で何がおこっているのかを考えながら、幼児に寄り添う保育を心がける。
- ・ 幼児の声に耳を傾けながら、どのような介入や支援が必要かを考えて保育を行う。

④ 仮説

- (ア) 保育者が幼児の発問に、注意深く耳を傾けながら、それを否定せず、肯定的に受け止めることで幼児との会話が発展するだろう。
- (イ) 保育者が活動の場において何が起きているのかを考え、幼児がどのように楽しんでいるか探るようにすると、定位置ではいられないであろう。
- (ウ) 保育者が幼児から出てくる言葉を楽しんで聞くことで、幼児の会話を面白く受け止めることができるであろう。
- (エ) 保育者が絵本の内容の会話を私語と捉えず、幼児とともに会話を楽しんで遊ぶことができるであろう。

と4つの仮説を立て検証した。

- (ア)については、保育者が幼児からの会話に、注意深く耳を傾けながら、それを否定せず、肯定的に受け止めることで幼児との会話が発展するだろう。
- (イ)については、保育者が活動の場において何が起きているのかを考え、幼児がどのように楽しんでいるか探るようにすると、定位置ではいられない

いであろう。(㉑)については、保育者が幼児から出てくる言葉を楽しんで聞くことで、幼児の会話を面白く受け止めることができるであろう。(㉒)については、保育者が絵本の内容の会話を私語と捉えとらえず、幼児とともに会話を楽しんで遊ぶことができるであろうとした。

今回は、私自身がなぜ思い違いにもとづく保育実践にはまるのか、また、公開保育での課題の克服は思い違い保育の解決になるのかを、仮説に基づき、検証保育で実践してみることにした。しかし、上記の仮説は支持されなかった。なぜ、検証保育の実践で支持されなかったのかについて、その理由を考えることにする。

(3) 検証保育

2月27日(木) 検証保育を実施し、今回の検証保育は、前回の4つの課題である保育者は、なぜ思い違いをしてしまうのかを知るための検証保育である。4つの問題点をもとに仮説を立てて仮説が支持されるか検証保育を実施した。参加者は、大学の研究者、大学院生(2名)、学部学生(3名)、小学校教諭、園長、指導係長、研究員

4つの明らかになった問題点から仮説を考えて、以下の4つの仮説を組み立てた。

仮説

- ①保育者が幼児の発問に、注意深く耳を傾けながら、それを否定せず、肯定的に受け止めることで幼児との会話が発展するだろう。
- ②保育者が活動の場において何が起きているのかを考え、幼児がどのように楽しんでいるか探るようにすると、定位置ではいられないであろう。
- ③保育者が幼児から出てくる言葉を楽しんで聞くことで、幼児の会話を面白く受け止めることができるであろう。
- ④保育者が絵本の中の会話を私語と捉えとらえず、幼児とともに会話を楽しんで遊ぶことができるであろう。

(4) 検証保育を終えて

私は前回のような保育者主導の保育こそしなかったかと思っていたが、その反面、そこで何もできない、何もしない保育者がいた。その場に立ち尽くし、ただ傍観し、何をどうすればよいのかまったくわからないのであった。幼児の会話を拾って、楽しく遊びを発展させることができるかなと期待したが、実際幼児の前に立つと、今まで自分が考えてもいない、ましては、想像もできないことが起きたとしか思えなかった。自分なりに考えてみると次のことがわかってきた。①については、幼児からでてきた会話をつなげようと考えているが、必死に会話をつなげようとする言葉を選ぶとき、この言葉は教えたがっているのではないか、この言葉は適切かを始終考え、さらに、保育者のひとことひとことが今までの保育者主導になるのではないかと不安が付きまとい何もできない、どうしていいかもわからない私自身がいた。②については、幼児が騒がしいと感じているが、そこで注意をしてしまうことは、また前回の保育者主導になるのではないかという思いで、どこかで誰かが絵本のなかの会話を楽しんでいるのではないかと思いつつ、騒がしいがこれでいいのかどうかの判断の鈍りと疑問をもちながら手出しができなかった。③については、幼児の会話を拾うために保育者が前回とは逆に動き回りすぎていた。なぜ、そこで会話を拾うということが必要か、会話をどうつないでいくのかがわからずにいる。そのことは、幼児との会話を全体の中でつなぎとして考えていないことではなかった。④幼児から発する会話を楽しむことはできなかった、会話を楽しむということの位置づけの甘さがあった。の4つの課題があきらかになった。

(5)ビデオ撮影した保育記録の中から

教材：絵本『からすのパンやさん』

作：絵 かこ さとし 偕成社

～絵本の中から～

あなたが しらないもりのなかで、 どこからか
こうばしい おいしいにおいが したら、 もりの
うえのほうをみてごらんさい。

もし、 かざぐるまが、 ちらちら まわっているの
が みえたら、 そこが からすの パンやさんが
いる いずみがもりなのです。

もしかして、 あなたは もりのなかで チョコち
ゃんたちにあえるかもしれませんよ



読み聞かせが始まっているのにおしゃべり？

C1：会えないよ。絶対に、しゃべるからす
いないのに。

C2：いずみが森はどこにあるの？

T1：どこにあるんだろうね

C3：森、森にある

T2：いずみが森、森にある

C4：でもあるかわからんよー

T3：あるかわからん、どうして

C5：わからん

T4：あるかわからーん

C6：どこにあるかわからないよう

T5：どこにあるかわからない

T6：どこにあるかなあ

C7：どこにあるかわからないからわからない

T7：どこにあるかわからないからわからない

T8：いずみがもり ふーん

T9：森の中で、なんて

C8：パンの旗！

T10：ああ、パン 森の中でパンの旗

パンの旗があったら、森の中でパンの旗があ
ったら、いずみが森かもしれない

T11：すごーいパンの旗ね



パンの旗があるでしょう！



好きな遊び真っ最中！

保育者は幼児との会話をこれ以上つないでいく
ことができなかった。その後、保育者は幼児との

会話を続けることができなかつたので、「今日は疲れたの？」と聞き返しながらか、そのまま保育は流れていった。子どもたちも保育者との会話がどのように続くのかと期待していた子もいたようだが、(表情から))何もしない、何もできないでいる保育者の態度に席を立ち、好きな活動の場所や好きな遊びへと移っていった。その後の保育室は、幼児の好き勝手な行動なつてしまった。

3. 思い違いにもとづく保育実践を克服するために

(1) その検証保育から明きらになつたことを整理すると仮説がまったく支持されなかつたことであつた。読み聞かせが始まる前から、幼児が集中に欠けていることを保育者は、わかつていなかつた。「いいですか。絵本を読んでもいいですか」という声かけから始めてもよかつたのではないか。仮説に縛られ、保育者主導にならないように考えすぎてしまい、一つ一つが自分の中でしっかりと理解されていないため、今回のようなことが起つてしまつたことが考えられた。第一に、保育者は幼児からの言葉をすべて肯定的に受け取ろうとしたが、そうすることで、幼児が騒いでいることもわからなかつた。会話のすべてを肯定的にうけるということは私語との区別がむづかしい。肯定的に受け取るだけではだめであるといことである。第二に、保育者は移動せず、定位置で幼児の様子を探つたほうがよかつたのではないか。それは、幼児は保育者に集中して初めて、会話が続けるのではないか保育者が定位置にいないがために幼児の集中力が切れた。第三に、保育者が幼児の会話をおもしろいと受け止めると、会話が続きと考へたがそれができなかつた。これは、会話をつなぐということは、保育者が会話の進行をするという思い違いのため、そのことが保育者主導になるのではないかということに捉われてしまつたためであつた。そのため、保育者自身が幼児の会話をおもしろいと受け止めることができず、会話をつなぐができなかつた。保育者自身も、幼児の中からでてくる会話を楽し

んで受け取れなかつた。第四に、保育者自身が絵本に関する幼児の会話を私語と受け取らないために、絵本の内容とまったく関係ない話と関係している話を聞いてまわることは、どこかで誰かが、絵本の内容を話しているのではないかと言うかすかな期待があつた。つまり、あくまでも保育者の考へ中には、絵本を通して幼児に何かを期待することを持っているのではないかと言うことが以上の分析からわかつた。

(2) 考 察

これらのことから、わかつたことは私自身、読み聞かせを始めるときに、子ども達に「先生が絵本持つて前に立つたら、静かにすわつて、おしゃべりもせずちゃんと聞くんですよ」と、型にはめた絵本の読み聞かせをしていたこと、躰に捉われ絵本をその道具として使つていたこと、保育者と幼児の信頼関係というよりもむしろ先生の話聞きなさいということを押付けをしていたことがわかつた。そのような中で、幼児に絵本の中の会話を楽しんでもらうということがいかに無理強いなことをこれまでの読み聞かせの実践を振り返り痛切に感じている。

これらのことから、思い違いにもとづく保育実践から抜け出すことは、私にとって、とても大変なことであるということがわかつた。これらのことが、明らかになつたことは保育者である私が、こどもに寄り添うといいつつも常に保育者自身が幼児の前で教え込もうとしていたことであり、また、絵本の読み聞かせで保育をつなげることは、押し付けにならないよう、幼児が保育者や周りの友だちとのかかわりながら幼児同士が育んでいく保育を模索しなければならない。幼児を大切にするということは、保育のあり方や、幼児の捉え方、そして一つ一つを問い直すとき、日々の保育実践を問い返す、もう一人の私を作り上げること、それを通してふり返り、吟味できることであり、思い違いの保育の克服の第一歩になるのではと中坪先生や當山さんは、指摘した。レッジョ・エミリ

アの教師が子ども中心主義の保育をおこなっていることを知ることができ、私の今までの一本のルールに幼児を乗せてしまう思い違いにもとづく保育実践から脱却したい。

Ⅶ 研究の成果と課題

1. 研究の成果

(1) 今回、琉球大学教育学部の中坪史典先生のもとで、レジョ実践を学ぶ機会に恵まれ、自分自身の保育記録の分析をレジョ実践のメンバーで、行ない、今まであまり経験したことがない本音で語ることや話し合いにおいては、相手を批判したりするようなことをしないで、それぞれの、成長を支えあうことと学びあうことができたことをとても感謝しています。

(2) 長年この方法でよいのかと何一つ疑問に思うこともなく、絵本の読み聞かせを子ども達に実践してきたが、次回からは子ども達の前に立つときに押し付けない、絵本の読み聞かせをすることができるようになった。

(3) 保育者が幼児の活動や考えを探ろうとすると定位置ではいられなくなるだろうという仮説についても、今回の検証保育では、幼児が集中していないのに保育者が巡回したため、検証が困難となってしまったが、この検証保育からわかったことは、保育の中で保育者が立つ位置がとても重要であることが再認識することができ、これまでの自分自身の実践では、あまり深く保育者の立つ位置のことなど考えたこともなかったが、活動の目的によって幼児の前に立ったり、幼児が主体となって、会話を楽しんでいるときは巡回したり保育者の立つ位置を変えていくことが大事であることがわかった。

(4) レジョ実践は現場に戻って、一人で実践していくと、それこそ、思い違いにもとづく保育実践になってしまうので、これからもつながりを大事にしていきたいと思います。

(5) 保育者が幼児の言葉に注意深く耳を傾けながら、幼児との会話を肯定的に受け止めること

ができるようになった。

(6) 絵本の読み聞かせのあとの幼児との会話を私語と捉えていたが、それは、幼児の興味や関心から出てくるものであるということがわかった。

2. 今後の課題

(1) 今回、仮説は支持されなかったが、次年度に、もう一度、仮説を組み立てレジョのメンバーで検証保育に望んでみたい。

(2) 保育者が成長するためには、経験を重ねるだけでは不可能であると思う。自分の保育を振り返って頭の中で保育を問い直してみることが私自身に足りなかったことだと思う。今後さらに研修をつんでいきたい。

(3) 保育者が幼児からでてくる言葉を楽しんで聞くことで、幼児の会話を面白く受け止めることができるであろうという仮説については、今回の検証保育においては、私語あっても、注意せず肯定的に受け止めようとしたことで、正しい検証をすることが困難となってしまった。しかし、保育の実践においては、有効な方法であり、今後の保育実践において検証していきたい。

(4) 幼児は絵本を読み聞かせた後、興味、関心が高まると、自然にその内容を楽しそうに夢中になって話したりする。保育者はそれを私語として捉えてしまいがちだが、むしろその会話を活かすことで、あそびが楽しく発展していくことになると思う。保育者はいたって、それを、打ち消してしまいがちだが、むしろその会話を活かすことで、楽しく遊びが発展していくことが可能となる。今回の検証保育においては、私自身が会話を発展させようと思い込みすぎてしまい、返って幼児の会話を発展させることができなかったが、捉われないように思い違いをしないように今後の実践の中で検証していきたい。

3. 終わりに

後期の研修生として、半年間、新築したピカピ

カのはごろも学習センターで学ぶことができ、振り返ってみると今までにない経験をさせていただいたと感謝しております。なかでも、琉球大学教育学部の中坪史典先生のもとで、大学の研究者、大学院生、学部学生、小学校教諭、他の幼稚園教諭や外部の人と連携し研究ができたことは私にとって、今までにない初めての経験でした。本研究を進めていく中で、中坪史典先生はじめレジヨ実践のメンバーのみなさんにはとても感謝しております。また、当研究所所長の宮城勇孝所長、研修係長の新垣英司先生、当研究所の職員の皆さんの日々の励ましに深く感謝いたします。私に研修の機会を与えていただいた普天間幼稚園園長上原正敬先生、職員の皆さんには公開保育、検証保育と二度もご協力していただき感謝いたします。

参考文献

・bc. エドワーズ/L. ガンディーニ/G. フォアマン=編
佐藤学・森真理・塚田美紀=訳 『子どもたちの 100 の言葉—レジヨ・エミリアの幼児教育』 世織書房 2001

資料

環境の授業へ幼児教育特論演習 (院生対象)
院生を対象とした幼児教育特論演習 (レジヨ・エミリア・アプローチ学習会) は、『子どもたちの100の言葉—レジヨ・エミリアの幼児教育—』の本をもとに、各章ごとに担当を決め、レジュメ作成し討議する。後期のゼミとして、毎週水曜日に午後5時から7時までの2時間の時間帯で行なわれる。毎回、活発な意見や討論で盛り上がり、2時間と言う時間内で全員が発言するには時間が足りず、3~4時間があつと言う間に過ぎてしまう。大学の研究者、小学校教師や幼稚園教師などから様々な意見が聞けて、今までに経験したことがないので、とても刺激的である。以下はレジュメの担当者と内容。

2002.11.18

『レジヨ・エミリアから何を学ぶか』

—リリアン・G・カッツ (p37)

担当：比嘉 雅江

・初めて学習会へ参加する。

2002.11.25

『歴史と思想と哲学』

—L・マラグツィー (p69~90)

担当：与儀 毅

2002.12.4

『歴史と思想と哲学』

—L・マラグツィー (P91~115)

担当：當山 しのぶ

2002.12.11

『歴史と思想と哲学』

L・マラグツィー (116~148)

担当：赤嶺 優子

2002.12.18

『学校経営における地域と教師の連携』

—S・スパッジャーリー (p149)

2002.12.18 担当：安里 美佐子

2003.1.8

『ドキュメンテーションから構成されるカリキュラム』

—C・リナルディ (p169)

担当：比嘉 雅江

2003.1.22

『ペタゴジスタの役割』

—T・フィリップーニ/S・ボニラウリー (191~207)

担当：當山 しのぶ

- ・自分を問い直す、自明性を問うとは？
- ・教師の自律性について

2003.1.29

『教育とケアの空間』

—L・ガンディーニ (p241~268)

担当：宮城 隆子

2003.2.5

『パートナー、保育者、案内人としての教師
の役割』

-C・エドワーズ- (269～303)

担当：赤嶺 優子

2003.2.12

『デザイン、ドキュメンテーション、ディス
コースによって交渉する学び』

-G・フォアマン/B・ファイフ- (p 371～405)

担当：當山 しのぶ

2003.2.19

レッジョ・エミリアの理論と実践

=彼らは何をなぜ行なっているかを知って
いる

-R・S・ニュー- (407～437)

担当：保志門 みち江

2003.2.26

『結論＝最後の省察』(p 449～464)

-C・エドワーズ/L/ガンディーニ/G・フォアマン-

担当：新垣 えみ子

- ・回想と再訪について
- ・自明性を問う